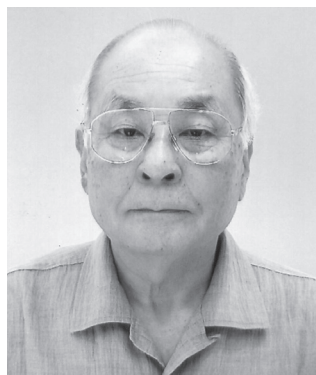




2010年1月10日

# いま起きつつあること…

村上伸先生の  
平和講演会から



死刑を  
どう考えるか  
③

第3回目の今回は、前号に掲載した「キリスト教と死刑」という項の後半部分に触れていきます。

古代から中世へ——  
キリスト教の変化

4世紀初頭、当時のローマ

皇帝コンスタンティヌスにより「ミラノの勅令」が出されました。いくら迫害をしようとも衰えることのないキリスト教を、勢いの衰えてきたローマ帝国に取り入れようと考えたのです。そして、コンスタンティヌスは自身も洗礼を受け、キリスト教をローマ帝国の公認宗教としました。

それ以来、キリスト教は支配者であるローマ帝国の宗教となったのです。

それまでは奴隷の宗教と言われ迫害を受けてきたキリスト教が、あらゆる特権を与えられ支配者の論理で考える支配者の宗教となりました。村上先生はこの出来事が世界史上での大きな転換であったと語っています。

初代教会の頃のキリスト教は片方で迫害を受けながら、片方ではイエスの教えに従い山上の説教を学び実行することによって、自らの生活を清く正しく守っていたのです。

ところが、支配者側に立つようになると、迫害されるどころか特権さえ与えられるようになり、清く正しい生活はなくなっていきました。それに何より、支配者という立場からなんとかして国家の秩序を守らなければならないという考え方が出てきてしまうのです。

それまでは、決して戦争はしない、兵隊にもならない、武器もとらないという考え方をしていたのが、支配者側に立つようになり、変わってしまいました。

例えば外国から異民族が攻めてきた場合、武器を取ってその敵と戦って敵を倒す、それはむしろ神様の正義に合うのだという考え方になっていきました。国家の秩序を守るためには、武力によって異民族を征服することも大切だという考え方が生まれてきたのです。

それ以来、中世ヨーロッパ

ではさまざまなことが起こりました。例えば魔女狩りや異端審問など、これらはキリスト教会が主導したことです。これらはいずれも、キリスト教が支配者のな地位について支配者の発想をするようになって、イエスの精神を忘れたところから起こったことだと、村上先生は言われています。

戦争、異民族征服、魔女狩りなど、多くの血を流す行為が正当化されたこの時代、死刑はあつて当然だと考えられていました。死刑は「神の応報の義」の地上におけるあらわれであると考えられていたからです。つまり、「神様は正しいお方で間違ったことはお許しにならない」という神様の正義を地上の権力者が代行し、悪を犯した人を裁かねばならないと考えられていたのです。

そして残念ながら、宗教改革者たちも例外ではありません



2010年1月10日

# いま起きつつあること…

んでした。死刑を当然のように考える、そんな時代が第一次世界大戦まで続くのです。

## パラダイム変換—— 従う者のキリスト教

第一次世界大戦は、ヨーロッパのキリスト教国同士が血で血を洗うような大戦争を4年間にわたって繰り返しました。

キリスト教的な世界だと言われていたヨーロッパにおいて最悪の戦争を体験した当時の知識人たちは深刻な衝撃を受けたのです。一体、キリスト教とはなんなのか、と。そして、世界を根本的に立て直さなければいけないと考え始めました。

その時にパラダイムの変化がおこったと、ある神学者が言います。

「キリスト教におけるパラダイム変化」という論文の中で、その時代にはその時代の物の

考え方の枠組みのようなものがあると記されています。例えば、「天動説」というパラダイムが地動説というパラダイムに変わった」というように、その時代時代にはパラダイムという物の考え方の枠組みのようなものがあって、それが何百年間という単位で変わってきたのだと言います。

歴史上では、そのパラダイムが変わるたびに激烈な争いが繰り返されてきました。一人の神学者は、それはキリスト教にも当てはめることができるのではないかと考えました。

原始キリスト教の時代には黙示録のような終末論的な考え方のパラダイムがあり、古代教会になるとギリシャ哲学の影響を受けてヘレニズム的なパラダイムに変わっていきます。

中世になるとローマカトリック教会の支配が強くなり、ローマカトリック的なパ

ラダイムが全体を支配し、その後、ルターとカルヴァンが出てきて宗教改革的なプロテスタント的なパラダイムが出てきました。

そのようにして時が流れ、第一次世界大戦が起こりました。そして、その時にパラダイムが根本的に変わるのです。今まで支配的発想であったパラダイムはもう通用しない。第一次世界大戦を経て破綻したキリスト教は、全く新しくしなければならぬ。そこで出てきたのが全く新しい形の神学だったので。

キリスト教の中に「支配者的発想」を克服して「下からの視点」を回復しようというパラダイム変換が起こりました。その流れの中で、第二次

世界大戦後には、解放の神学、女性の神学、黒人の神学など、今まで軽蔑されていた人々の側から改めて聖書を読み直す第三世界の神学が生まれました。

支配的発想を克服することにより、死刑の問題も根本的に考え直されるようになりました。

神に従う者と考えるキリスト教の出現、これが現代のパラダイムです。教派の違いを乗り越えて、同じような考え方を深め、同じように祈りをもって実践していく、そういう時代になってきました。

こうい時代にあって、死刑は「神の応報の義の地上におけるあらわれ」という考え方を維持していくことはできません。新しく考え直し、中世のキリスト教の考え方を乗り越えなければなりません。それが現代における私たちの使命なのです。

(続く)